

立山に降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならし

越中万葉の山 — 二上山と立山 —

たまくしげ 二上山に 鳴く鳥の 声の恋しき 時は来にけり

奈良時代、『万葉集』の代表的歌人であり、編者ともされる大伴家持は、越中の地に国守(国の長官)として満五年、国庁が置かれていた伏木の地に滞在した。家持と部下の官人たちは、越中を舞台に三百首以上もの歌をよみ、その詩情あふれる歌の数々は「越中万葉」と呼ばれる。その「越中万葉」の歌々の中に登場する二つの山——二上山と立山——。大伴家持は、奈良の都の人々にも歌を通じて、その魅力を語り伝えようとした。家持には、二上山と立山は、いかなる山として映っていたのであろうか。

高岡市万葉歴史館

二上山

—ふたがみやま—

天平18年(746)に奈良の都から大伴家持が国守として赴任した越中国庁(現在の県庁に相当)は、二上山の山裾にあった。家持はその二上山を神の山として讃美している。

越中時代の伴家持の歌には、「二上山(二上)」という地名は、「二上山の賦」(巻十七・3985~3987)など、長歌・短歌を含め8首の歌によみこまれているが、それはあくまでも歌の中に含まれている数にすぎない。麓の国庁で職務に励み、日々の生活を送る家持は、常にこの山の自然を意識し、作歌に励んだことであろう。

現在二上山は富山県高岡市北部に位置する。標高が274mあり、頂上からは、富山平野、立山連峰をはじめ、富山湾や遠く能登半島が一望できる。そのため、戦略的にも重要な山とされ、中世から近世にかけて西の峰に山城(守山城)が築かれた。山が二つ並んで見えるポイントが少ないのは、山城が築かれるために削られたからであろう。



大角 勲「大地共生」(金属造形・当館蔵)



野上祇麿「ふるさとの詩」(油彩画・富山県人社蔵)



岡田繁憲「雨晴海岸」(日本画・新作)

山ぼめの歌

—国土繁栄を祈る心—

古代において、山は神の降臨する場であり、靈威に満ちた聖なる空間であった。大伴家持は、「二上山の賦」・「立山の賦」で、越中国の国守として、二上山・立山を、共に「すめ神(国の神)」の鎮座する神の山と、山ぼめの歌をよんだ。それは、国守として越中の国の繁栄を祈願することでもあった。

家持は歌の中で、山裾を流れる川についてうたう。二上山については「射水河 い行きめぐれる」と、射水川(現在の小矢部川)が二上山をめぐるように流れるとよみ、また立山については「帯ばせる 片貝河の」と、片貝川を立山の帯にたとえている。

川の流れは、国土に恵みをもたらす。その恵みとは、神のいる山の靈威が川の流れによって運ばれたものと、古代の人々は信じていたのかもしれない。

春の特別企画展「越中万葉の山 —二上山と立山—」

期間:平成19年4月18日(水)~5月7日(月)

協力:岡田繁憲・富山県人社・富山県立高岡西高等学校・高岡市立万葉小学校

高岡市万葉歴史館

〒933-0116 富山県高岡市伏木一宮1-11-11 電話:0766-44-5511 FAX:0766-44-7335
E-mail:manreki@office.city.takaoka.toyama.jp http://www.manreki.com